



東高だより 一はなみずき一

第4号
(H23.5.6)

「初夏の光」

カーテンをなでる風の冷たさで目が覚めた。途中で眠ってしまったようだ。読みかけの本が背表紙を上にしたまま横たわっている。

ベッドから身を剥がし、重い体をもてあまし気味に立ち上がった。窓から外を見る。田には水が張られ早苗が植わっている。背後の山が新緑を纏い、さざ波にところどころ削られるようにして水面に張り付いていた。

長閑な田舎の風景なのに、どうもしっくりこない。もどかしい気持ちちがせり上がってくる。

田植えといえば、むかしは梅雨時期の風物詩だった。それが今は品種改良が進み、5月の頭だというのに田植えがすっかり終わっているのだ。

去年もそうだったが、今年も同じことを思い出してしまった。一種のトラウマに似ている。歳を取るにつれて、自分の中で何かが壊れていく。未来に目を向けることができず、過去を懐かしむことで壊れた自分を慰めようとしている。歳をとった証拠だ。

その当時はまだ耕耘機もなく、水を引き込んだ田は牛で代掻きをした。農具をつけられた牛がゆっくり水の中を進む。ならした田んぼは数日おいて、近所の人たち総出で田植えが始まる。大人も子供もみんな田植えにかり出される。子供である私たちの仕事は苗運び。定木を使って苗を植える大人の背後に等間隔に苗束を置いていく。ヒルに足の血を吸われることもあった。

切りがいいところで昼ご飯になる。昼ご飯の用意も共同でやった。薪が燃やされ、大釜がぐつぐつと湯気を立てる。いい匂いが辺りに広がり、空腹を刺激する。私はそのときに出される炊き込みご飯が大好きだった。甘く煮付けられた鶏肉がふんだんに入った炊き込みご飯。コンビニの味に慣れた今の子供は、そんなものに見向きもしないだろうが、ハンバーガーも知らなかった私たち子供にとっては、それが大のご馳走だった。草の上に筵を敷き、子供たち同士でワイワイやりながら食べる昼ご飯は何よりもおいしかった。

考えるに、あの頃はいっぱい人の温もりがあった。プライバシーはなかったかもしれないが連帯はあった。近所同士でいろんなものを分かち合った。めでたいことがあると共に喜び、不幸ができると慰め合った。用具の貸し借りは当たり前。小銭がないといっちはすぐ近所に走ったものだ。

なのにどこで間違ったのか、生活の根本が変わってしまった。物質的に豊かになってくるに従って、何かが大きくひずみ、「温」が欠落して「冷」が忍び込んできた。便利な生活を求めることは決して悪いことではない。実際、私たちは現在その恩恵に浴して暮らしている。家庭では電化製品が普及し、特に女の人が余暇を持つことができるようになったし、交通機関の発達で我々の行動圏も広がった。さらに、情報通信社会の到来で生活にスピード感が生まれ、ボタン一つで多くのことが可能になった。便利極まりない。衣食住の面でもはるかに恵まれた生活を送っている。一時、日本人の大半が中流意識を持っていたほどだ。

問題なのは、心の持ちようである。お金をいっぱい稼いで贅沢な生活をするのが、いつしか生きる目的にすりかえられてしまった。お金のある人間がない人間より偉い。地位が高く尊敬される。幅をきかす。そういう風潮が生まれ、国民全体が拝金主義に感染し、目の前にぶら下がったニンジンめがけて疾走し始めた。人を押しのけ大きいニンジンを狙う。目的のためなら手段を選ばない。結果がすべて。それも楽しんでいち早くいい結果を、だ。

当時の生活を思うと、半分は当時に返りたくない、と思う自分があることに愕然とするときがある。要するに、「飼い慣らされたのだ」。それを認めようとしないう自分の軟弱さに腹が立つ。これ以上飼い慣らされると、いつか、あの頃が本当の幸せだったんだ、と後悔する日が来る。過去の憧憬の中のみ幸福感を求めなければならないとしたら、それは悲しいことだと思う。

窓外に広がる水田。今年も田植えは終わってしまった。泥だらけになって苗束を運び、畦道に萆薺を敷いて炊き込みご飯を食べた、あの頃の田植えの風景は、もうない。

今、子供たちに見せるべき原風景がどんどん消えている。このままでいいのか。将来の子供たちが初夏の光の中に見出すものは何か。決して現代人が使い古した文明の残骸なんかであってはならない。



